
ハル、ナツ、アキ、フユ

クラッキー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハル、ナツ、アキ、フユ

【Nコード】

N21400

【作者名】

クラッキー

【あらすじ】

ずっと好きだった幼なじみが、自分の姉と結婚する。どうして私じゃないの？もし、あの時こうしていれば何かが変わったのかな？素直になれない夏海と、夏海の想いに気付かない冬樹。幼なじみ二人の過去と現在。恋と友情。成就することのない初恋と片思い。

一部、加筆、訂正しました。

倉田家と立花家（前書き）

初めての投稿です。読みにくかったり、おかしいところがあったり
するかも知れませんが、
暖かい目で見守ってください。

倉田家と立花家

明日、私のお姉ちゃんが結婚する。

両親も相手の家族も、非常に喜んでいる。

ただ、私だけは喜べない。

私自身の気持ちの整理が、まだ出来ていないから…。

お姉ちゃんの結婚相手が、アイツじゃなければいいのに…。

幼なじみのアイツじゃなければ…。

何度も忘れようとしたこの気持ち。

私の初恋のアイツ。

今でもアイツのことが…。

私の姉、倉田春海は細身で、女性としては高めの身長。

茶色がかったショートカットの髪。

私とは二つ違い。

モデルのような外見だが、思ったことをそのまま口にする、良く言えば素直な性格。

「空気が読めないんじゃないじゃなくて、空気を読む気がない（親友の談）」
誰にでも分け隔てなく接するので、意外と敵は少ない。

小さい頃は男勝りで、私はいつもお姉ちゃんの後を付いて回っていた。

『強い女ってカッコいい』と始めた空手は有段者。

特に男嫌いではないが、長身美人の外見に惹かれて近寄る男を、一刀両断。

彼女に関わった男性は、二度と近寄らなくなるか、ずっと男友達でいるかの二者択一を迫られる。

いわゆる、カツコイイ女性で、同性にモテるタイプ。

ちなみに身長は、『170はナイ（自己申告）』らしいが、168センチの私よりも大きいから本当かどうか…。

私の名前は夏海。

顔立ちも、スタイルも姉に似ていて、美人…なはず。

違うのは、肩まで伸ばした黒髪であること。

そして、性格は正反対に近い。

最も大きな違いは、素直じゃないこと…。

お姉ちゃんの婚約者、立花冬樹の家は、倉田家のすぐ隣。

両家の間には生け垣があるが、隙間から簡単に行き来出来る。

小さい頃、私も冬樹もココを使っていた。

倉田家の父（倉田剛）と、立花家の父（立花雅樹）は幼なじみで、今は飲み友達。

倉田家の母（倉田洋子）とも古くからの友人で、何かにつけて、倉田家で宴会が始まる。

冬樹と私は、立花家の母親（立花佳代）の顔を、写真でしか知らない。

お姉ちゃん達も、辛うじて記憶がある程度だ。

冬樹が二歳になる前に亡くなったらしい。

子供の頃、立花家にはおばあちゃんがいたが、冬樹が中学生になる前に亡くなった。

両親どころか、祖父母も健在の倉田家とはかなり違う。

冬樹には、二つ上の姉、秋代がいる。

うちのお姉ちゃんと同級生で、もちろん二人は親友。

おっとりふわふわの可愛らしい女性。

彼女も背が高いが、倉田姉妹よりは小さい。

胸の大きさは倉田姉妹の完敗…。

外見とは裏腹にしつかり者で、周りに気を遣える。

『弟の面倒を見てね』という彼女の母親の遺言を守り、料理を含めた家事万能。

『弟が一番』でいわゆるブライコン。

「他のどの人よりも手強い（春海談）」

冬樹は、そんな秋姉ちゃんが少しウザイようだが、姉には頭が上がらないみたい。

私も、秋姉ちゃんを尊敬している。

恋愛方面には興味がなく、うちの姉とは違う方法で、近寄る男を一刀両断。

学生時代は、秋姉ちゃんと仲良くなる為には、私の姉の検閲を通過しなければ近付けなかったらしい。

そして、立花冬樹。

身長は、ヒールを履いたうちのお姉ちゃんより高い優男。

子供の頃は、四人の中で一番チビだったのに…。

顔は、鼻眞目抜きでイケメン。

『家族を守る強い男になりなさい』と、彼のおばあちゃんに言われたことから、空手を始める。

かなりの強さで、高校の時は全国レベルだった…らしい。

いつもボーっとしてて、何を考えているか分からないところがあるが、やる時はやる男なので人望も厚い。

運動神経は良く、頭もいい。

誰にでも優しいので、勘違いする子も多い。

私も、その中のひとりだったりする…。

私は、いつから冬樹が好きだったんだろう…？

倉田家と立花家（後書き）

まずは、プロローグ的なお話です。

説明くさい文章なうえに、長くなってしまいました。

こんな感じでいいのだろうか？

春く約束く（前書き）

今回から、夏海が過去の恋のフラグを振り返ります。

春　く約束く

「わたしが、ふゆきのおよめさんになってあげる」

物心ついた時には、もう一緒にいた。

いつも、四人で遊んでいた。

うちのお姉ちゃんは、弟が欲しかったらしい。

「ねえ、秋ちゃん！私の妹と、秋ちゃんの弟を交換してよ！」

「私は冬樹が大好きだから、春ちゃんにはあげない！」

うちのお姉ちゃんと、秋姉ちゃんは、いつも冬樹を取り合っていた。

私だって、冬樹を独占したかった…。

お姉ちゃん達が幼稚園に行っている間は、私が冬樹を独占出来た。

四人で遊んでいるのは、楽しかったが、二人だけの時間は、もっと楽しかった。

私は、この頃には冬樹のことが好きだったのだろう。

当時は、『恋』だとは気付いていなかったが…。

多くの若い男女が交わす約束。

「大きくなったら、僕のお嫁さんになってくれる？」

公園の桜が散り始める頃、桜の木の下で冬樹が言った。

「えー、どうしよっかなー」

私は、素直に返事を返さなかった。

本当は、もの凄く嬉しかったはずなのに…。

「じゃあ、私が冬樹のお嫁さんになってあげる。」

泣きそうな顔の冬樹を見て、お姉ちゃんが言った。

冬樹は、お姉ちゃんと結婚の約束をした。

素直になっていれば…。

いつしか、四人が一緒に遊ぶこともなくなり、私と冬樹は、学校でも話すことはなくなっていた。

無視しているわけではない。

二人だけになれば、普通に会話もした。

そもそも、二人だけになること事態が、なくなっていたのだ。

お姉ちゃんは、冬樹と同じ空手道場に通っていた。

帰ってくると、いつも冬樹のことを話していた。

私の知らない冬樹を、お姉ちゃんは知っていた…。

お姉ちゃんは、いつから冬樹が好きなのだろう…？

夏　く短い会話く

「別に嫌ってないよ。」

私達の関係は、中学生になっても相変わらずだった。

イヤ、むしろ悪化したと言っている。

一年生の一学期は、クラスが別だったこともあって、一言も話さなかった。

廊下ですれ違っても、挨拶どころか、視線すら合わせない。

嫌いになったわけではない。

どんどん大人びていく冬樹に、向き合うことが出来ないほど、好きになっただけなのかも知れない。

「やっぱり、立花君が一番カッコイイと思う。」

「でも、もう少し背が高いほうが良くない？」

「身長なんてすぐ伸びるってー！」

「夏海はどっと思っっ？」

「…。」

『どっと思っっ？』と聞かれても…。

答えられるわけがない。

自分の本心を見透かされそう…。

友達同士の何気ない会話に、妙な焦りを覚えた。

「そっいえば、夏海と立花君って、幼なじみじゃなかったっけ？」

「小さい頃、結婚の約束とかしてたりする？」

「してないよ…。」

「なんだー、つまんない！」

嘘はついていない。

私とは、約束してないのだから…。

夏休みの終わり頃、家の前で偶然、冬樹に会った。

いつものように、何食わぬ顔で通りすぎようとするど、

「おい！」

冬樹に呼び止められた。

「お前、なんで俺を無視するんだよ。」

「別に無視してないよ。特に、話し掛ける用事がないだけ…。」

「だったら、挨拶ぐらいしろよな！俺が何か嫌われるようなことしたかと思うだろ！」

「ごめん…。別に嫌ってないよ…。」

「まあ、いいけど。今度からは挨拶ぐらいしろよな。じゃあな！」

久しぶりに交わした短い会話が、私のモヤモヤを消してくれた気がした。

秋（予感）（前書き）

呼称についての補足

夏海は、春海や友人からは『夏海』、秋代からは『夏ちゃん』と呼ばれています。

春海は、冬樹からは『春姉ちゃん』、秋代からは『春ちゃん』です。秋代は、春海からは『秋ちゃん』、夏海からは『秋姉ちゃん』です。冬樹は、みんなが『冬樹』と呼んでいます。

会話のシーンを少し分かりやすくするための補足です。

秋　く予感く

「冬樹は夏ちゃんが好きだから」

三年生になると、冬樹と同じクラスになった。

変なモヤモヤや、わだかまりもなく、小さい頃みたいに、…とはいかないけれど、挨拶もすれば、話もする。

くだらないことで、笑い合うことが出来るようになっていた。

お互いの友人を交えて、毎日、それなりに楽しかった。

普通に接することが出来るようになって、少し欲が出てくる。

二人でいることが出来たら…。

こうなると、冬樹への恋心を否定することは出来ない。

「夏海と立花君って、付き合ってるの？」

「付き合ってるじゃないよ！幼なじみなだけ…。」

「じゃあ、私もちょっと頑張ってみようかな。」

中学生になり、冬樹は急激に身長が伸びた。

女子にしては身長の高い私も、追い越した。

元々、整った顔立ちなので、冬樹を好きな子は多かった。

この頃、小さい頃から一緒にいる私は、他の子に冬樹を取られるわけがないという、妙な自信があった。

なんの確証もないのに…。

残暑も終わり、少し肌寒くなった頃、家に帰ると秋姉ちゃんがいた。

「夏ちゃん、久しぶり！」

高校生になった秋姉ちゃんは、ますます可愛らしい女性になっていた。

高校生になっても秋姉ちゃんは、『弟が最優先』だったが、それは母親代わりの感覚に変わっていた。

「夏ちゃんは高校どこ行くの？うちの高校に来るの？」

お姉ちゃん達は、「大付属高校に行っていた。

「まだ、S女子大付属と迷ってて…。」

「共学のほうが、絶対楽しいって言うてるのに、夏海は頑固だから。」

お姉ちゃんは、女子のグループ付き合いが苦手なので、共学を選んだと言っていた。

秋姉ちゃんは、「春ちゃんと同じ高校に」という理由。

「冬樹は、うちの高校って言うてたよ！空手部があるのは、この辺じゃ、うちの高校だけだからね。」

お姉ちゃんは、中学を卒業すると空手道場を辞めた。

『強過ぎる女の子は、モテないから』という理由で…。

高校生になってからも、道場へは、ちょこちょこ遊びに行っている

みたいだったけど…。

「冬樹と同じ高校のほづが、夏ちゃんも楽しいんじゃない？」

ドキツとした。

「私の進学と、冬樹は関係ないから…。」

「えー、でも冬樹は嬉しいと思うよ。たぶん、冬樹は夏ちゃんが好きだから。」

「「えっ！」「」

秋姉ちゃんの衝撃発言に、私達姉妹は絶句する。

この時の私は、秋姉ちゃんの言葉より、お姉ちゃんの悲しそうな表情が、気になって仕方がなかった…。

なんとも言えない、嫌な予感がした…。

お姉ちゃんも、もしかしたら…？

冬く告白く (前編) (前書き)

少し長くなるので、前編後編に分けました。

冬く告白く (前編)

「大事な友達だから」

秋姉ちゃんの衝撃的な発言から、私達姉妹の間には、少し微妙な空気が流れる。

お互いの胸の内を探るような…。

冬休みのある日、お姉ちゃんと二人で、テレビを見ていると、

「夏海は、冬樹のこと…、どう思ってる？」

視線をテレビに向けたまま、お姉ちゃんがおもむろに口を開く。

「…どうって？」

お姉ちゃんの真意を図りかねていると、

「好きとか…、嫌いとか…。」

「好きだよ…。小さい頃からの『友達』…だし…。」

ちよつと嘘をついた。

「…お姉ちゃんは？」

「私も好きだよ…。」

「それは…、弟みたいな感じで…でしょ？」

「始めはそうだと思ってたんだけど…。」

お姉ちゃんの答えは、私の期待したものとは違っていた。

「それって…。」

お姉ちゃんも、冬樹が異性として好きってこと？

最も強力な恋敵が、こんなにも身近にいたなんて…。

しかも、私がかんうはずのない相手…。

一度回り始めた歯車を、止める術もなく月日は流れ、私達は高校入試を迎える。

結局、私は、S女子大付属を受験し、冬樹はもちろんT大付属。

合格発表の前日の昼休み、

「ねえ、ねえ、ちょっと夏海、大変、大変！」

「何が？」

「立花君が、高校受かってたら、好きな子に告白するんだって！」

「えっ！」

「男子達が話しているの聞こえちゃったの！立花君の好きな子って、もしかして、夏海じゃないかなあ。」

「何で私よ！冬樹とは、幼なじみだけって言ってるじゃん！」

冬樹の好きな子は、私であって欲しいと、誰よりも願っているのに、またしても素直になれなかった私。

ここで、自分に正直なっていれば…。

少しの勇気を出していれば…。

その後の人生も、変わったかも知れないのに…。

『私は冬樹が好き』

この一言が言えなかった…。

冬く告白く (後編)

そして、合格発表の日。

私は、自分の受験結果よりも、冬樹のことが気になって仕方なかった。

受験の結果は、二人ともそれぞれの高校に合格していた。

その日の放課後、友人達と高校合格を喜び合った後、帰宅した。

帰る前、冬樹の姿を探したが、もう帰った後だった。

友達と別れ、家の前に来ると、門の前に人影を見つける。

学生服を着た男の人影。

遠くからでも見間違えるはずのない、その人影。

立花冬樹だった。

高鳴る心臓を落ち着かせ、出来るだけ平静を装い、近づく。

冬樹が私に気が付き、「よう！」と言う感じで片手を挙げる。

「お前、S女（S女子大付属高校）受かったってなあ。おめでとう。」

「

「冬樹もT大付属受かったじゃん。おめでとう。」

そんなことよりも、今、聞きたいことがあった。

「…だ、誰か待ってるの？」

「ちょっとな…。」

「ふ、ふーん。」

ちよつと声が裏返ってたかも。

落ち着け私。

「…。」

「…。」

「…俺に何か用でもあるのか？」

「えっ！別に…。」

「あーそう。」

冬樹に不思議そうな顔で見つめられた。

「じゃ、じゃーね。」

「おう。…あつ、そうだ！」

「な、な、何？」

「夏海は、何があっても、大事な友達だからな。」

久しぶりに「夏海」と呼んでくれた。

「えっ！それって…」

どういう意味？

「じゃあな。」

私の言葉を遮るような別れの言葉。

私は、門をくぐると、後ろを振り返ることもなく、足早に家の中に入る。

「ただいま」も言わずに、自分の部屋に籠もる。

そうしないと、途中で涙が零れそうだったから…。

私は、着替えもせず、枕に顔を押し付けて泣いた。

私じゃなかったんだ。

部屋の外から、おばあちゃんの「夏海、帰ったの?」という声が、聞こえた気がした。

それから、どれくらい時間が経っただろう?

不意に、私の部屋をノックする音が聞こえた。

「夏海、ちょっといい?」

お姉ちゃんの声だった。

「…何?」

思いの外、冷たい声で返事をしてしまう。

「私、冬樹と付き合うことになったから…。」

私の様子を察してか、部屋の外からお姉ちゃんが報告する。

「…あーそう…。」

またしても、冷たい返事。

こうして、私の初恋は終りを告げる。

その後、冬樹とは一言も話すことなく、私達は中学を卒業した。

冬く告白く (後編) (後書き)

ここで、第一部完了です

。話はまだまだ続き、もう少し大人になった夏海たちの話として第二部になります。

伝えられなかった想い（前書き）

今回から第二部開始です。

伝えられなかった想い

失恋の痛手を引きずったまま、冬樹のいない高校生活が始まる。

進路を決める時は、家は隣同士なのだから学校が別でも、いつでも会えると思っていた。

実際には、高校時代は冬樹の顔を一度も見えていない。

二、三回、遠目に見かけたり、後ろ姿を見かけたりしただけだった。

当時は、逆にそのほうが良かったかもしれない。

もし、バッタリ会ってしまったら、どうしていいか分からなかったから…。

冬樹がいない学校生活は、意外に楽しかった。

新しい友達も出来たし、学校行事も楽しかった。

斉藤千絵と言う親友に出会ったのも、高校生の時。

ショートカットで、明るく活発な可愛らしい女の子。

どことなく、お姉ちゃんに雰囲気似ている。

もう一人の親友は、広田詩織。

無口でおとなしい女の子。

高校入学直後の詩織は、いつも一人でいることが多く、クラスで浮いていた。

そんな子を、放っておくことが出来ない千絵が、強引に詩織を仲間に引き入れ、私達三人はいつも一緒にいるようになる。

修学旅行の夜、二人に冬樹とのかを初めて話した。

布団に入り、夜遅くまで三人で号泣した。

私のことで、一緒に泣いてくれる人間に初めて出会えた気がした。

問題は学校ではなく、家での生活にあった。

この頃から、私達姉妹の間で、冬樹の話をしたことは一度もない。

『あの日』の私の様子からか、元から気付いていたのかは判らない

が、お姉ちゃんは、私も冬樹が好きなことは気付いていたのだろう。

「冬樹君は、夏海と付き合ってると思ってたよ。」

お母さんの言葉にお姉ちゃんは、悲しそうな、申し訳なさそうな、なんとも言えない顔をした。

「冬樹君なら、春海でも、夏海でも、どっちでも嫁にくれてやるぞ。」

お父さんのおかげで、この時は笑い話で済んだが…。

私は、お姉ちゃんを困らせたいわけでも、憎いわけでもない。

だから私は、家では努めて明るく振る舞って見せた。

そんな私の姿は、お姉ちゃんにはどのように映っていたのだろうか？

どうして私じゃないんだろう…。

そう思うだけで、夜、布団に入ると涙がこぼれた。

休日、お姉ちゃんが出かけると、冬樹とデートなのだろうと思い、気分が沈んだ。

冬樹と二人で過ごす夢を何度も見た。

朝、夢を思い出して泣いた。

『あの時』、勇気を出して動けば、何かが変わったのだろうか？

勇気を出して、想いを伝えていれば…。

そんな感じで、私の高校生活は終わり、エスカレーター式で大学に進学した。

新しい恋が始まることもなく…。

終わりを告げた恋を引きずったまま…。

二十歳の春　く帰り道く（前書き）

呼称についての補足その2

斉藤千絵は、女の子には名前を呼び捨てで、男の子には君付けで呼びます。

広田詩織は、女の子にはちゃん付けで、男の子には君付けで呼びます。

ちなみに、冬樹は春海を「春海さん」と呼ぶように変わりました。一応、彼氏と彼女なので。

二十歳の春　く帰り道く

あれから四年が過ぎ、私達は大学二年生になった。

さすがに四年も経つと、冬樹のことを考えることも少なくなっていた。

GWも間近のある日の朝、

「夏海ー、詩織ー、おっはよー!」

「おはよう。」

相変わらず、朝からテンションの高い千絵。

「ところで…、お嬢様方に折り入ってご相談と言つか、お願いがございます。」

「イヤ。」

こういう時の千絵の願いは、ロクなことがない。

「ちょっとー、まだ何も言っていないじゃん。夏海、酷くない?」

「どつせ、ロクなことじゃないでしょ!」

「夏海ちゃん、話だけでも聞いてあげたら?」

「詩織は優しいね。どこのシンデレお嬢とは違って!」

「だ、誰がシンデレよ!...で、お願いって何?」

「一緒に合コンへ行ってください!」

「はあー?」

「...!」

「バイト先で、T大の男の子と知り合ったんだけど、その子とその子の友達と、合コンすることになっちゃって。」

「私はパス。」

「ゴメン夏海、パス出来ない。モデル系の美人と、ロリ系の可愛い子連れてくって言っちゃった!」

言っちゃったじゃないよ...。

「それって私も?」

「もちろん詩織も。だから夏海、お願い!」

「私、合コンって嫌い。他の子探してよ!」

「じゃあ、合コンじゃなくて、『飲み会』ってことにすれば?..その」
に、たまたま、男の子がいたということでごごご?..」

それを、『合コン』と言っのでは？

結局、断りきれず、『飲み会』に行くことになる。

私に、次に進むきっかけを与えようと、千絵なりに気を使ったのだろっ。

そう好意的に解釈した。

「ちょっと夏海！何ダラダラ歩いてるの！もう男の子たち来てると思うから、いい加減に覚悟決めなさいよ。」

考え事をしながら歩いていると、千絵に急かされた。

「私、合コンって初めてだからちょっと楽しみ。」

だから詩織ちゃん、『合コン』じゃなくて、『飲み会』って言うてるじゃん！

「あっ！千絵ちゃん、こっち、こっち！」

三人組の男の子の一人に呼ばれた。

その瞬間、一番端でつまらなそうに頬杖をついていた男の子が、ゆつくり、こつちを見る。

「…。」

「…。」

「「…あーっ！」」

久しぶりに見たその男の子の顔は、私が知ってる顔より大人になっていた。

立花冬樹だった。

「何だよ！お前たち知り合い？」

「えーと…、中学の…同級生？」

何で疑問系なのよ！

「何であんたがここにいろの？…おね…彼女はいいの？」

「春海さんには、ちゃんと許可を取ってきた…。」

「よく許してくれたね。何て言ってきたの？」

「『飲み会』って…。」

あんたもかよ…。

「あー、えーと、冬樹は…、嫌がるコイツを、俺が無理矢理引っ張ってきた。えーと…、何かゴメン。」

「何で康太君が謝るの？私も嫌がる夏海を、無理矢理引っ張ってきたから同じだよ。」

せつかく前向きになってきていたのに、何でこうなるの？

「…ねえ夏海？…冬樹君って…あの冬樹君…だよね？」

「…そうだよ。」

千絵達に泣きながら話したあの冬樹。

「…ごめんね…。」

さすがの千絵も、申し訳なさそうだった。

「…別に…大丈夫だよ。」

「家が近くなんだから、冬樹君は夏海を送って行ってね。」

駅前で解散する時、千絵が私達に言った。

私に向かって親指を立てながら…。

あの子はホント余計なことを…。

「なあ、千絵ちゃんっていう子、何で俺達の家が近くだって知ってるんだ？中学の同級生とは言ったけど…。」

さっきから黙ってると思ったら、そんなことを考えていたのか、コイツは！

「…中学の同級生だから、家も近いと思ったんじゃない…。」

ちよつと苦しい言い訳…？

「そうか…。。でも今日は、本当にビックリしたよ！」

「私も…。まさか、彼女がいる冬樹と合コンで会うとは…。」

冬樹にいたずらっぽい笑みを向けてみる。

ちゃんと、笑えていただろうか？

「分かってると思うけど…、春海さんには絶対に言うなよ！」

「言うわけないじゃん！今日は、私も、冬樹も、友達と飲みに行ったら、たまたま昔の知り合いに会いました…でしょ？」

二人きりでも、思ったたより普通に話せた。

「元気だった？」

「おう。っていうか、春海さんと俺の話はしないの？」

「うちはそういう話、あんまりしないから…。」

「女の人って、彼氏とか、好きな人の話って好きじゃないのか？…『恋バナ』ってやつ？」

「プツ…フフフ！」

「何笑ってんだよ…！」

「ゴメン、ゴメン、冬樹の口から、『恋バナ』っていう単語が出てくるとは思わなかったから。」

「うちの姉ちゃんは、いつも聞いてくるぜ。自分のことは興味ないくせに、人のことは気になるみたいで。」

「秋姉ちゃんは、冬樹が凄く大事なんだよ。お母さんがいないから、

『私が冬樹の母親代わり』みたいな。」

「分かっているんだけど、時々、鬱陶しいんだよね。」

秋姉ちゃん程、弟思いのお姉さんなんて、めったにいないのに…。

「じゃあ、またな！たまには連絡くらいしろよ！」

「うん、またね！」

冬樹の携帯番号なんて、私は知らない…。

あえて聞くこともしなかった…。

番号やアドレスを知っていても、連絡することはないと思ったから…。

二十歳の春　く帰り道く（後書き）

お酒は二十歳になってから。

二十歳の夏　く海く（前書き）

ご覧頂いている方、評価して頂いた方、誠にありがとうございます。
皆様の応援だけが頼りです。

二十歳の夏　〜海〜

「海へ行こうよ!」

夏休みも間近の頃、千絵がまた、おかしなことを言い出した。

「…海って…三人で?」

「違うに決まってるでしょ!この前の男の子達と六人で!」

それって、冬樹も?

「何か面倒くさいからイヤ。」

だって、冬樹とはあんまり会いたくないし…。

「お願い、夏海!親友の恋を応援すると思って!」

「康太君と二人で行けばいいでしょ!」

「だって付き合ってもいないのに、いきなり海に二人きりだと気ま
ずいじゃん!」

だから、私も気まずいの!

「私は…、行きたいな…。」

「おっ!詩織は乗り気だね。」

「この前…、冬樹君…達と、あんまり話せなかったし…。」

珍しく積極的な詩織。

また嫌な予感がした。色々な意味で…。

渋々、海に行くことになった日の朝、私はわざと、待ち合わせ場所に、時間ギリギリに着くように家を出た。

冬樹と二人で行くわけにはいかないし、途中で会っても困るし…。

54

「あつ、やっと来た！もう夏海、遅い！みんな来てるのに。」

「ゴメン、ゴメン。支度に手間取っちゃって！」

「海に行くのに、どんだけ支度が必要なんだよ、夏海。」

冬樹の言葉にドキツとした。

遅くなったのはあんたのせいだ！

「夏海ちゃん！時間にルーズな女の子は嫌われちゃうよ。」

この日も、詩織は楽しそうだった。

集合時間には間に合ったはずなのに…。

「ホント…、すみません…。」

みんなに謝りながら私は、『夏海』と冬樹に呼ばれたのはいつ以来だろう?…と考えていた。

この日は、夏休みに入った直後の平日だったこともあり、海はそれほど混んでいなかった。

しばらく遊んだ後、遊び疲れた私は、みんなを眺めていた。

千絵と康太君は、二人で楽しそうだ。

千絵は康太君が好きだけど、おそらく、康太君も千絵のことが好きなんだろう。

冬樹は、詩織と楽しそうに話していた。

あの男は、まったく…。

詩織が勘違いして、面倒くさいことになっても知らないよ!

この頃から、詩織は変わってきた。

前より笑うようになったし、何事にも積極的になってきた。

友達になっただばかりの頃は、話し掛けないと全く喋らなかったのに……。

そんなことを考えながら、みんなを眺めていた。

「夏海ちゃん!どうしたの?」

一人でいた私に、もう一人の男の子のカズヤ君が、声を掛けてくる。

あれ?

カズキ君だっけ?

まあ、どっちでもいいや。

「ちょっと疲れたからひと休み。」

一人にして欲しいんだけどと思っていると、

「今、俺のことウザイと思ったでしょ?」

ヤバっ、顔に出てた?

彼は特に気にする様子もなく、

「夏海ちゃんって、ツンデレだよな。」

「こつこつところがウザいだよね…。」

「君には『ツン』はあっても、『デレ』はないから。」

ちょっと疲れてイライラしていた所為か、思わず声に出してしまつ。

「…。」

啞然とする彼を残し、飲み物を買に行つた。

もしかしたら、お姉ちゃんも同じこと言うかも?と思ひ、後で思いだし笑いをした。

「じゃあ冬樹君、また夏海をよろしく!」

駅でみんなと別れる時、千絵が言う。

「分かつた。まかせろ!」

と返す冬樹。

でも、あんたはきつと、何も分かつていない。

帰り道は、また冬樹と二人になった。

「お前、連絡しろって言ったじゃん！冷たい奴だなあ！」

「だって、番号もアドレスも知らないもん…。」

「やっぱりそうか。実はこの前、俺も、『夏海の番号知らない』って、家に入ってから気付いたんだよ。」

「私、聞いた覚えも、教えた覚えもないし…。」

「春海さんに、夏海の番号を聞こうとも思ったけど…。」

「…！」

やっぱりコイツは、何も分かってない。

「携帯出せよ。赤外線で送るから。俺のも送るから登録しとけよ。」

私の携帯電話のアドレス帳に、初めて『立花冬樹』が登録された。

中学の時は、携帯電話を持っていなかったから。

この時はもう、気まづくはなかった。

私達はこの時、『大事な友達』に戻ることが、出来ていたのだろうか

か？

「お前、何か雰囲気変わったよな。」

「そう…かな？」

「ああ。丸くなったっていうか…、昔はもっとツンツンしてたよな…。」

四年の月日は、私を変えることが出来たのだろうか？
冬樹への想いは、まだ消えていないのに…。

家の前で冬樹と別れた後、そんなことを考えながら、家に入る。

「ただいま。」

「おかえり。」

リビングで、雑誌を読んでいたお姉ちゃんが返事をした。

「どこか行ってたの？」

お姉ちゃんの問題かけに、ドキツとした。

「友達と…、海に行ってきた…。」

嘘じゃないよ…。

「ふーん。」

一緒に行ったのは、みんな友達だよ…、お姉ちゃん…。

冬樹も含めて…。

この時、お姉ちゃんは、何かに気付いていたのかな？

二十歳の秋　〜遊園地〜

「あの…、二人に報告というか、相談がある…んだけど…」

私達三人が一緒にいるようになってから、恐らく初めて、詩織から話を切り出した。

「なに、なに？」

詩織の、思いもしない発言に興味深々の千絵。

「えーっと…、うまく説明出来ないんだけど…、…やっぱりいい…」

「ダメ。今日は詩織が話すまで帰さない！」

千絵の言葉に覚悟を決めたのか、ぽつりぽつりと詩織が話し出す。

「私…、冬樹君が…好き…かも…。」

「……………」

「……あうっ、えっ！」

多分、生まれてこの方、一番驚いた。

「それは…、異性としてってこと？」

私同様、驚きを隠せない千絵の問い掛けに、コクリとうなずく詩織。

「アイツ…、彼女いるんだよ…。」

「分かってる…。」

私の問い掛けにもうなずく詩織。

「付き合っただけかと思ってるわけじゃないの…。でも…、こんな気持ち初めてで…、戸惑ってるの…。」

「うーん…、詩織の初恋かあ…。」

千絵の言葉に、一瞬、幼い頃の冬樹が頭に浮かんだ。

「彼女がいる人を、好きになるのはダメなのかなあ？夏海ちゃん、どう思う？」

「良いも悪いも、私に決める権利なんてないし…。」

「多分、物凄く辛い思いをするよ。それでもいいの？引き返すなら今のうちだよ。」

私が、偉そうに説教出来る立場じゃないのに。

「そういえば…、夏海ちゃんに相談出来る話じゃなかった。無神経でごめんなさい…。」

申し訳なさそうな詩織を見て、私は何も言えなくなってしまう。

「よし、決めた！康太君に私の気持ち伝える！」

「…？」

何やら考え込んだ千絵が、どういう流れでそういう結論になったか、全然、見えてこない。

「夏海、詩織、遊園地に行くよ！もちろん、いつものメンバーで！告白と言えば、夕暮れの観覧車でしょ！」

「しょうがない、付き合ってやるか！」

この時、私はごねたりしなかった。

詩織の相談に結論は出ていなかったけど、何か行動を起こせば、何が変わると思ったから。

「おっすー！」

「おはようー！」

遊園地に行った日は、家の近くのコンビニで、冬樹と待ち合わせてから、みんなのところへ向かった。

私達は海に行った日以来、時々、メールをしていた。

この時も、前日、メールで打ち合わせていた。

待ち合わせ場所は、『家の前でいいじゃん。』と言う冬樹に、怒りを覚えた。

お姉ちゃんに見られたら、どんだけ面倒くさいことになるかと思っ
ているのか…。

「遊園地なんて、小さい頃、うちとお前の家族で行った以来だよ。」

「私は高校生の時、千絵と詩織で行ったことがあるよ。」

「そういえば、小さい頃に行った時は、親とはぐれて四人で迷子になっ
たっけ?」

「そんなこともあったね。」

「あの時は、夏海がフラフラしてたからだぞ。」

「はあ?それ違うし。迷子になったのは、お姉ちゃんの所為。」

この日、駅に向かう道では、二人とも何だかテンションが高かった。

駅前に着くと、すでに詩織がいた。

私達に気付いた詩織は、手を振りながら表情を曇らせる。

やっぱり、冬樹と二人で来たのは、間違いだったか…？

「あのね…、しお…。」

「おっはよー！夏海！詩織！それから冬樹君も！」

詩織に言い訳しようとした時、千絵が来た。

康太君もカズキ君もいた。

「おはよう！ち…。」

「あれー？詩織、その大きな荷物なに？」

またしても私の言葉を遮りながら、千絵が詩織に問い掛ける。

言われてみれば、詩織は少し大きめの荷物を持っていた。

「あっ！これは…、お弁当…。みんなの分も作ってきたんだけど…。
男の子ってどれくらい食べるか分からなかったから、足りないかも
…。」

「…！」

「…！」

「…！」

「千絵ちゃん…。俺、今、ズキユンってきた…。」

「康太君…。私もだよ…。詩織ったら、可愛いーい！ー！」

そう言いながら、千絵は詩織に抱きつく。

「じゃあ、俺がそれ持つよ。」

さり気なく、詩織の荷物を持つ冬樹。

「あ、ありがとう…。」

顔を紅くする詩織。

それを見ていた私は、苛立っていた。

遊園地での私は、ずっと不機嫌だった。

私の不機嫌だった原因が、冬樹だと気付いたのはもっと後になってから。

海に行った時と同様、千絵と康太君は仲良く騒いでいる。

そんな二人を見ているだけで、イラついた。

詩織は冬樹にベツタリだった。

そんな二人にも、イラついた。

楽しそうな親友達を見て、八つ当たり気味にイラついていた私自身に気付き、自己嫌悪に陥った。

この日もカズキ君は、私の側で何か話していたが、私の耳には入ってきていなかった。

一通り遊んだ後、康太君が観覧車に行こうと言い出す。

「じゃあ、男女ペアで乗ろうよ！」

待ってましたとばかりな千絵。

「賛成！」

賛同したのはカズキ君。

「冬樹君…、一緒に乗ろう…よ…。」

顔を真っ赤にした詩織。

「うん、いいよ！」

冬樹が応える時、一瞬、チラッと私を見た気がした。

そうになると、私はカズキ君とだよね？

やっぱりこうなるか…。

「ハア…。」

思わず溜め息が出たが、カズキ君は気付いていなかった。

観覧車に乗ると私は、黙ったまま外を見ていた。

何か言いたそうなカズキ君には気付いていたが、そのまま景色を眺めていた。

「夏海ちゃんって、彼氏いないんだよね？」

意を決して話し掛けてくる彼に、

「うん…。」

景色を見たまま返事をする私。

「好きな人はいるの？」

「…！いない…よ。」

一瞬、ピクツとしたが、ぶっきらぼうに返事をする。

彼にまで、嘘をつく必要はなかったかな？

「じゃあさあ…、俺と付き合ってみない？」

「ごめんなさい。」

即答してしまった私。

「じゃあ、友達からっていつのはどいつ？」

「ごめん、それも無理。」

しつこい彼に苛立って、冷たい返事をしてしまう私。

「…。」

ここで初めて、チラッと彼を見ると、ガツクリ肩を落としている姿

が見えた。

「カズキ君なら…、他にもっといい子が見つかるよ…。」

さすがにキツ過ぎたと思いフォローしてみる。

そう、私なんかよりいい子が…。

「ねえ…、俺の名前知ってる？」

「…？名前って？カズキ君…でしょ？」

「違う…。俺の名前…、和也…。」

「…！あっ、ごめん…。」

そっだ、和也君だ！

「…。」

「…。」

その後、二人とも無言のまま観覧車を降りた。

観覧車を降りると、遊園地はライトアップされていた。

観覧車を降りた千絵と康太君は、見つめあったり微笑みあったり…。

二人とも頬が少し紅かった。

あの様子だと、結果は聞くまでもないだろう…。

様子がおかしかったのは、冬樹と詩織。

康太君に話し掛けられた冬樹の笑顔は、どこかぎこちなかった。

詩織は、明らかに様子がおかしかった。

笑顔は消え、心ここにあらずという感じだった。

帰りの電車の中、和也君は放心状態。

それを見た私の心は少し痛んだが、それよりも詩織の様子が気になつて仕方なかった。

その表情は、いつかのお姉ちゃんの表情に似ていた。

駅に着き、みんなそれぞれの帰途につく。

まだ、9月のだというのに、夜は肌寒かった。

「じゃあみんな、バイバイ！康太君、行こつ！」

「じゃあな！和也、元気出せよ！」

千絵と康太君は、二人で夜の街に消えて行く。

和也君も肩を落とし、帰って行く。

和也君…、ホントごめん…。

「バイバイ…、夏海ちゃん…、冬樹君…。」

手を振る詩織。

その表情は、精一杯の笑顔を作っているように見えた。

私達に背を向け、足早に歩き出すその姿は、泣いているようにも見え…。

「夏海、帰るぞ！」

冬樹に呼ばれ、私達も家路につく。

「千絵と康太君、あれはきつと上手くいったよね？」

「…。」

返事がない。

「冬樹、聞いてる？」

「えっ、あっ、ごめん、何？」

何か考えながら歩いているようだった。

この日の帰り道、私達はそれ以降言葉を交わすことはなかった。

胸騒ぎがして仕方がない秋の夜道だった。

二十歳の秋　く遊園地く（後書き）

康太のことは、千絵がいつも夏海達に話しているから、夏海は名前を覚えています。

カズキという名前は、和也と冬樹がごちゃ混ぜになってしまったのでしょうか。

和也カワイソすぎ…。

二十歳の冬　くカフェく

前日に、木枯らし一号が吹いたというニュースが流れた二十歳の冬の初め、私は駅前のカフェにいた。

今日こそは、アイツに言ってやらないと気が済まない！

私は、苛立ちを抑え切れず、そのカフェで冬樹が来るのを待っていた。

私が苛立っていた理由は、その日の午後の出来事が原因だった。

「今日はもう講義ないから、買い物付き合ってよ。」

「ゴメン夏海。今日はこれから康太君と約束してて！」

やっぱり、友情より愛情ですか？

千絵は、『夕暮れの観覧車での告白』が成功し、この時は、康太君と付き合っている。

「あーそう。女の友情ってそんなもんだよね…。」

ちよっと拗ねてみせる。

お約束という感じで。

「拗ねた夏海も可愛いー！また今度付き合っから、ゴメンね。じゃあねー！」

親友が幸せそうなら、それで問題なし。

詩織と二人で行くとするか。

「詩織は付き合ってくれるよね？」

「…。」

返事がない。

「…詩織？」

「あつ、ごめん、何？」

この頃の詩織は、ボーっとしていることが多かった。

話し掛けても返事がないことも多々あった。

まるで私達が出会った頃のように…。

イヤ、もっと酷い。

あの頃は、返事だけはしてくれたから。

「何か悩み事でもあるの？相談に乗るよ。たいしたアドバイスも出
来ないけど。」

「うん…。」

私には、詩織の悩み事に心当たりがあった。

「もしかして…、冬樹のこと？」

「…！」

凶星だった。

「冬樹と何かあったの？」

単刀直入に聞いてみる。

言おうかどうか迷っている風だった詩織だが、ゆっくりと口を開く。

「みんなで遊園地に行った時に…。」

やっぱりそうだ。

詩織の様子がおかしくなったのは、観覧車を降りた後からだ。

「行った時に？」

あの時感じた胸騒ぎを思い出す。

「冬樹君に…、ふられちゃったの…。」

詩織の目から、涙がこぼれた。

「…！ふられたって…、告白した…の？」

「うん…。観覧車の中で…。」

「…。」

言葉を失った。

だって、付き合いたいわけじゃないって言ってたのに。

「あの日…、一緒にいたら、どうしても我慢出来なくなったの…。」

二人きりでいたって思っちゃった…。」

『二人でいたい』

いつかの私も思ったこと。

「アイツはやめろって言ったのに…。」

今の詩織に、言うてはいけない言葉だった。

「何それ！どうしてそういふこと言っつの？」

詩織が私に見せた怒りの表情に、「しまった!」と思った。

「あつ、ごめん。」

「私、冬樹君を好きになったことは、後悔してないよ!上手くいくはずがないって分かってたし!」

「…。」

詩織の剣幕に黙ることしか出来ない私。

「どうせ心の中で、私のこと笑ってるんですよ。バカな女って!」

「そんなことない!」

今更、何を言っても遅い。

「誰かさんみたいに、何も言えなくて、ウジウジしてるよりもよっぽどマシだと思う!」

「…!」

鈍器で頭を殴られたような衝撃だった。

「あつ、ごめん…。言い過ぎた…。」

「…。」

詩織の謝罪の言葉も、耳に入っていない。

気付いたら、一人になっていた。

詩織は、居たたまれなくなってどこかに行ってしまったのだろう。

ふと冷静になったら、冬樹に対して怒りがわいてきた。

遊園地で感じたイライラの原因も、冬樹だったと気付く。

アイツはいつもそうだ！

私だけじゃなく、詩織にも他の子にも。

詩織を泣かせたのもアイツせい。

詩織と喧嘩したのもアイツのせい。

私が辛い思いをするのも、みんな冬樹のせい。

今思えば、八つ当たりもいいところ…。

送信『今から駅前のカフェに来て。大事な話がある。』

受信『了解!』

短いメールのやり取りをした後、苛立ちを抑えられず冬樹を待つ。

「あつ、いたいた!遅くなってごめ…ん?」

笑顔でカフェに入ってきた冬樹は、私の表情を見て笑顔を消す。

「どうやら、私の怒りは、顔に出ていたようだ。」

「大事な話ってなんだよ…。」

私の顔色を伺いながら、冬樹が切り出す。

「詩織をふったってどうということ?」

出来るだけ、怒りを抑えて言っただつたが、それが余計に、私の怒りを冬樹に伝えてしまったようだ。

「だって、俺、彼女いるし…。」

冬樹は、私の怒りの原因が何なのか、良く分かっていないようだ。た。

「そういうことを言ってるんじゃないの!どうしてそういう事態に

なっただかってこと!」

「言ってる意味がよく…。」

「分かんないの?彼女がいる身で、他の子を勘違いさせて、どっぴうつもりってこと!」

「…?」

「あなたの何気ない優しさが、相手を傷つけることもあるのよ!」

「そういつつもりじゃなかったんだけど…。」

「あなたはいつもそう。自分が相手にどう見られているか考えもしない!」

「…。」

「あなたの何気ない優しさが、いつも事態をややこしくする。」

「詩織ちゃんにも、同じこと言われたよ…。」

「…!」

「『冬樹君の優しさは、冬樹君を好きな女の子を傷つける』って…。」

「

「…!」

「…。」

周りを見渡すと、私達の『痴話喧嘩』を見ている人達がいた。

「お前つて…、自分のこと以外は、思っていることを素直に言えるんだな…。」

ドキツとした。

「…！何…それ？」

「言葉通りの意味…。」

「…。」

「…。」

しばしの沈黙の後、

「もう…、連絡して…こない…で…。」

涙を堪えるのに必死だった。

今は泣いてはダメだ！

伝票を持って立ち上がるうとした時、

「今日はおごるよ。」

私の手は空を掴み、一足先に伝票を取り上げた冬樹の手に一瞬ふれた。

「…。」

私は足早に、無言でカフェを出た。

クリスマスモードに染まりつつある駅前には、すっかり暗くなっていった。

必死に涙を堪えて家にたどり着き、自分の部屋に入り、携帯電話を取り出す。

『立花冬樹を削除しますか？』

『YES』

携帯電話の電話帳から、冬樹の番号を削除すると、ついに涙を堪えることが出来なくなった。

泣きながら、詩織の言葉を思い出す。

『何も言えなくてウジウジしてる』

冬樹の言葉を思い出す。

『自分のこと以外は、素直に言える』

『私は冬樹のことが好き』

結局、この言葉は一度も伝えたことがない。

今まで、何度も機会があったはずなのに…。

詩織に、心ない言葉を言ってしまったのも。

冬樹に八つ当たりしたのも。

あれから何年も経っているのに、未だに冬樹のことを引きずっていてい

るのも。

全ては私自身の所為。

私は冬樹に対して、一度も素直になつたことがない。

これが全ての元凶。

こうして、後悔だけを残し、二十歳の冬は過ぎて行つた。

二十歳の冬　～私の部屋～

冬樹と喧嘩した翌日、私は学校をさぼった。

冬樹のことよりも、詩織のことの方が私を悩ませていた。

昼頃、千絵からメールがきたが、返事は返さなかった。

その日の夕方、詩織が一人で私の家にやって来た。

たまたま家にいたお姉ちゃんが、詩織を私の部屋に通す。

「元気…なの？」

「うん…。」

「学校…、さぼっちゃダメだよ…。」

「心配かけてごめん…。」

「お姉さん…、綺麗な人だね…。」

「会っの…、初めてだったけ？」

「うん。」

「…。」

「…。」

お互いの出方を伺う会話をした後、沈黙がおとずれる。

「…昨日は…ごめん。詩織の気持ち考えず、無神経なこと言って…。」

「うん。私の方が酷いこと言った…。」ごめんなさい…。」

「…。」

「私にとって、夏海ちゃんと千絵ちゃんは、物凄く大切な…。私の初めての…親友…だから…。」

「私もだよ…。このまま離れていくのはイヤ…だけど…。」
ぎこちない会話。

しばらくすると、コン、コンと部屋をノックする音。
そして、お姉ちゃんの声が部屋の外から聞こえた。

「夏海ー。もう一人友達が来たよー。」

入って来たのは千絵だった。

「よっ！お二人さん！仲直りは出来たかね？」

おどけてみせる千絵。

事情を知った上で、何とか、場を和ませようとする千絵が何だか可笑しかった。

「ちよつとー、何笑ってるの、夏海！」

つられて詩織も笑い出す。

「詩織も笑ってるー！何なのよー、あんた達は！」

千絵と詩織は矢わずに済みそうで、ホツとした。

「それにしても、夏海のお姉さんも綺麗な人だね。」

「私もそう思った！」

「初めて夏海を見た時もそうだったけど、私が男なら、間違いなく惚れちゃうね。」

「何よ、それ！でも、性格にやや難有りだから、惚れたら苦労するよー！」

今まで通り、三人で笑い合うことが出来た。

千絵と詩織の優しさに、涙が出そうになった。

その日、千絵は、詩織の様子がおかしいことに気付き、何があったか聞き出したらしい。

詩織がどこまで話したか分からないが、私と喧嘩したことは話したようだった。

千絵は、学校に来なかった私のお見舞いにかこつけ、詩織と私を仲直りさせようと画策する。

詩織は、先に私と二人で話しがしたいと言い出す。

千絵は時間をずらして、私の家に来る。

これが、時間差で二人が家に来た真相。

詩織と喧嘩した後、冬樹に絶縁宣言したことは、二人には話さなかった。

この年は、本当に色々なことがあった。

冬樹に偶然再会し、『大事な友達』に戻ることが出来た。

それなのに、また冬樹から離れることになってしまった。

新たな年が来てすぐ、成人式があった。

色艶やかな振袖や、格好いいスーツに身を包んだ旧友に再会した。

みんな少しずつ大人になっていた。

成人式には、冬樹も来ていたが、私達は会話を交わすどころか、視線を合わすことさえしなかった。

まるで、私が冬樹を意識し始めたころに戻ったみたい…。

外見だけ大人になっても、内面は中学生のままだった。

そんな自分に、思わず苦笑いした。

一度、狂ってしまった歯車は、元に戻らず時間だけが過ぎて行く。

詩織は、失恋の痛手から立ち直り、元に戻っていく。

前よりも、更に明るくなったと言うほうが、正しいかも知れない。

詩織には、彼氏も出来た。

千絵と康太君は、私達が大学四年の夏前に、別れてしまった。

お互いの就職活動の忙しさによるすれ違いが原因らしい。

さすがの千絵も、最初は落ち込んでいたが、直ぐに立ち直り、次の恋を探していた。

私は、相変わらず冬樹を引きずっていた。

今回は、『後悔』の二文字も加えて…。

『失恋は女の子を強くする（b y詩織）』

『前の恋を忘れるには、新しい恋が一番（b y千絵）』

そうして私達は、大学を卒業した。

それぞれの心に、恋の傷跡を残して…。

二十歳の冬　　私の部屋　　（後書き）

今回で、第二部「大学生編」完結です。

話は小説冒頭の時間に戻り、まだまだ続きます。

第三部で完結予定です。

両親と二人の娘（前書き）

今回より第三部です。

大学を卒業した後の夏海達の話です。

両親と二人の娘

成人式以来、私は冬樹を街で見かけることもなかった。

いつかのように、偶然出会うこともなかった。

隣に住んでいるのに、おかしなものだ。

お姉ちゃんは、私の前では相変わらず冬樹のことを話さない。

だから私は、冬樹が何処で何をしているのかも分からない。

私が冬樹について知っているのは、大学は卒業して働いていること、お姉ちゃんとはまだ付き合っていることの二点だけだった。

私が社会人一年目の梅雨の頃、家に帰るとお母さんに呼ばれた。

「再来週の日曜日、あんた家にいるの？」

放任主義の倉田家においては、珍しい事を聞いてくるお母さん。

『自分の行動は自分で責任を持ち、どうしても困った時は、手遅れ

になる前に、私達に相談しなさい。』

これが、私の両親の教え。

「まだ分からないけど、何で？」

「春海が、ついに冬樹君と結婚するの！それで再来週の日曜日に、冬樹君が挨拶に来るから。」

ついにきたか。

社会人になってからは、いつかこういう日が来ることを、覚悟していたつもりだった。

「ふ、ふーん…。」

出来るだけ私の動揺が分からないように、返事をしたつもり。

「今さら挨拶なんておかしな感じよね！私なんて、冬樹君のオムツを取り替えたことだってあるのに。」

お母さんは嬉しそうだった。

そのおかげで、私の動揺はバレずに済んだ。

「…再来週だと、もしかしたら休日出勤になるかも…。」

もちろん嘘だ。

「そうなの？まあ、夏海と冬樹君は知らない仲じゃないし、無理な

らしょうがないか。」

私は一体、いつまで逃げているのだろうと思い、自己嫌悪に陥った。

「あなたがまだ子供の頃、春海はあんな感じだから、結婚出来ないんじゃないかと思って心配だったのよ！夏海は大丈夫だと思ってたけど。これでちょっと安心した。」

多分、私の方が結婚出来ないよ、お母さん。

心の中でそう呟き、苦笑いした。

このままじゃ先に進めない。

そうかといって、解決する方法も思いつかず、途方に暮れるしかなかった。

冬樹が我が家に挨拶に来る日、私はやっぱり逃げた。

千絵と詩織を呼び出し、ことの顛末を話した。

「夏海はいつまでそんなことやってるの！」

「夏海ちゃんはもう。」

千絵には説教され、詩織は呆れるばかりだった。

ホント、何やってんだろう、私は…。

その日、まだいたらどうしようと思いつつ、冬樹が帰る頃を見計らって家に帰る。

私が帰宅した時は既に、冬樹もお姉ちゃんおらず、ホツとした。

「…お姉ちゃんは？」

と聞いてみると、

「隣に行った。」

少しお酒が入って、顔が赤いお父さんが答える。

「今日は冬樹君の家で、晩ご飯食べるんだって！秋代ちゃんもいるから、あんたも行ってきたら？」

「わ、私はいいよ…。」

お母さんの言葉に、イヤな汗をかく。

「幼なじみ四人が揃うことなんて、これからほとんどないのに…。」

淋しそうなお母さんは、冬樹のお母さんを思い出していたのかも知れない。

「しかし、あの春海が結婚ねえ…。」

そう呟いたお父さんも、少し淋しそうだった。

それからお姉ちゃん達の結婚話は、トントン拍子で進む。

夏には住む場所を決めて、二人で暮らし始めた。

両親は淋しそうだったし、私も淋しかった。

色々あったけど、私はお姉ちゃんが好きだったから。

お姉ちゃん達は、披露宴はせず、教会で式だけ挙げることにしたらしい。

そして、結婚式の前日に、我が家で両家の親戚を集めて、内輪だけで宴会をすることになった。

親戚もそんなに多くないので、それで充分だというのが、お姉ちゃん達の主張。

私にとっては、その日が最後のチャンス。

私の二十年渡る想いに決着をつけるための…。

しかし、この土壇場においても私は、何も行動を起こすことが出来ず、いたずらに時間だけが過ぎていった。

秋代と夏海

明日、私のお姉ちゃんが結婚する。

両親も相手の家族も、非常に喜んでいる。

私だけは喜べない。

私自身の気持ちの整理が、まだ出来ていないから……。

お姉ちゃんの結婚相手が、冬樹じゃなければいいのに……。

何度も忘れようとしたこの気持ち。

『私は今でも冬樹のことが好き。』

一度も伝えたことがないこの気持ち。

今更、『好きだ』と言ったところで、冬樹が私に振り向いてくれるわけがない。

万が一、お姉ちゃんとの結婚がダメになっても、冬樹が私を選ぶことは、百パーセントない。

そんなことは分かってる。

私は、そこまで幻想を抱くほど子供ではない。

ただ、この胸の内のモヤモヤを、簡単に消し去ることが出来るほど、大人にも成り切れていない。

あの日の『後悔』に決着を付けなければ、私は先に進むことが出来ないのだ。

いっそ、決着を付けなくてもいいかと思っただけもある。

しかし、そこからは新たな後悔しか生まれません。

何とかしなければいけないのだ。

そんなことも分かってる。

機会があつたのに、逃げ回ってばかりいた私。

残されたチャンスは今日しかない。

冬樹に『私の思い』を伝える手段も、方法も思いつかなかった。

私は自分の部屋で、途方に暮れるしかなかった…。

思い出を振り返り、涙することしか出来なかった…。

突然、ドアをノックする音がする。

「はい…。…誰？」

「夏ちゃん！私だよ！」

秋姉ちゃんの声だった。

「どうぞ。。。」

急いで涙を拭い返事をする。

「夏ちゃん、久しぶり！手伝いに来たよ！元気…だ…った…？」

涙の跡に気付かれた。

さすが秋姉ちゃん。

久しぶりに見た秋姉ちゃんは、すっかり大人の女性になっていた。

「そうか…。最愛の姉が嫁いでしまうのが、悲しいんだね…。って、違うよね。…冬樹のこと？」

「…！」

この人は、何でもお見通しなのだろう。

「やっぱり…、夏ちゃんも冬樹が好きだったかあ…。」

さすがの秋姉ちゃんも、困った顔をした。

「違うの…。確かに私も冬樹が好きだったけど…、今更どうこうするつもりはないの…。」

「…？」

「ただ…、今のままじゃ先に進めなくて…。」

「つまり、自分の気持ちを整理したいということ？」

「うん…。」

「うーん…。」

しばらく、秋姉ちゃんも考え込む。

「やっぱり…、夏ちゃんの気持ちを伝えるしかないと思う。」

「でも…、その方法がなくて…。」

「大丈夫、方法はある。立場上、夏ちゃんの応援は出来ないけど、私が二人で話ができるようにしてあげる。」

「えっ！」

「私にまかせて！その代わりに、今日で気持ちに整理をつけるって約束してね。」

そう言って、秋姉ちゃんは私に笑いかけた。

その笑顔は、どこことなく冬樹に似ていた。

「分かった。約束する。」

「よし！じゃあ、おばさんの手伝いに行こう！私、おばさんに、夏ちゃんを呼んで来るように言われたんだった。」

私は、『私のもう一人のお姉ちゃん』の背中に、「ありがとう」と
呟いた。

聞こえないように、小さな声で。

冬樹と夏海

夕方になると、親戚達が続々と集まり始める。

『ピンポン』

また、誰か来たようだ。

「ただいまー。」

お姉ちゃんだった。

当然、冬樹もいる。

「お帰り、お姉ちゃん！冬樹も…久しぶり…。」

「お、おう…。久しぶり…。」

私達のぎこちない挨拶は、お姉ちゃんは気にしていないようだ。

久しぶりに会った冬樹は、また大人になっていた。

宴会が始まると、私とお母さん、秋姉ちゃんは忙しくて、余計なことを考える暇もなかった。

外がすっかり暗くなり、一段落ついた時、

「ねえ、おばさん！お酒が足りなくない？」

突然の秋姉ちゃんの発言。

そして、私の方を見ながら小さく微笑む。

…ん？

何かするの？

「うーん、大丈夫だと思うけど、念のため買い足した方がいいかも。余ってもどうせお父さんが飲むし。」

お母さんの判断を聞くと、秋姉ちゃんは、私にアイコンタクトを取る。

えっ！

何？

「お母さん…、私が買いに行つていいよ…か？」

これでいいの？

秋姉ちゃんは、お母さんに分からないように、OKサインを作りながら、

「じゃあ、冬樹に荷物持ち兼ボディーガードを頼もう！」

えっ！

驚きの声を辛うじて飲み込む。

「でも、冬樹君は今日の主役じゃない？私が行こうか？」

「いいの、いいの！これぐらいしか、冬樹の使い道なんてないんだから！」

お母さんに言いながら、私をチラッと見て、冬樹を呼びに行く秋姉ちゃん。

もう逃げられない。

私は、覚悟を決めるしかなかった。

「何で俺が行くんだよ。」

「おじさん達に頼むわけにはいかないでしょ！それに、こういう時の為に空手を習ったんでしょ？」

「チツ…。」

舌打ちした冬樹だったが、やっぱり、秋姉ちゃんには逆らえない。

私が部屋を覗くと、お姉ちゃんがチラツと私を見たが、おばさん達と話を続けた。

「…。」

「…。」

「気まずい…。」

私達は、微妙な距離を空けてスーパーまでの道を無言で歩く。

「…何か喋んなさいよ！」

「…何で命令口調なんだよ！…そういう所は春海さんにそっくりだな…。」

そこから、スーパーまでの道はまた無言が続く。

お母さんに頼まれた物を買ひ、荷物を冬樹に渡し、来た道を戻る。

私はようやく覚悟を決め、ゆっくり口を開く。

「あのさあ……、今から私が言うこと……、ちょっとビックリさせちゃ
う……かも……知れないんだけど……。」

「……？何だよ……。」

ぶっきらぼうな冬樹の返事に、心が折れそうになる。

私は小さく深呼吸をして、少しの勇気を付け足す。

「私……ね……、ずっと……ね……、……好きだったの……。冬樹のことが
……、男の人として……！」

言った、言えた、ついに言えた。

ちゃんと言えたよね？

心臓の音がうるさい。

上手く呼吸が出来ない。

酸欠気味で少し気が遠くなる。

怖くて冬樹の方は見れない。

「やっぱりそうだったか…。」

ん？

今、何て言った？

『やっぱりそうだったか』って？

どういふこと???

えーっ！

「こんな俺でも、色々考えるんだよ…。」

「????」

私の方が、ビックリして言葉が出ない。

「二年…、もう三年前か。お前の友達の詩織ちゃんと、色々?…あつた時に言われたんだよ。」

「…。」

「今まで、冬樹君の何気ない優しさに傷ついた子がいないか考えて

って…。それで…。」

「それで…?」

やっと言葉が出た。

「それで、子供の頃から振り返ると、まず最初にお前が出てくるわけだよ。」

「…?」

「夏海の行動とか、態度を思い出して、コロコロ変わるお前の表情を加えると、そういう結論に達したわけ。」

「…。」

「お前は昔から、考えていることがすぐ顔に出るからな。」

「うつ、うつるさい!」

「ちょっと考えれば、簡単に分かることだったのに…。そういう方面は、俺も鈍感だよ…。これじゃあ、姉ちゃんのことバカに出来ないよ。」

「ハハハ…。」

自嘲気味に話す冬樹に、引きつった笑いを返す私。

「実はあの日…、駅前のカフェでお前と喧嘩した日…、さっきみたいなことを、お前に言われるかも、と思ってたんだよね…。」

「えっ！」

また驚かされる私。

もつとつにでもなれ！と思えてきた。

「もしそうだったらどうしよう、と思いながら店に入ると、何かお前、めちゃくちゃ怒ってるし、わけが分からなかったよ。」

「…！」

恥ずかしさで、この場から逃げ出したくなった。

確かに、あの時のメールは、私の気持ちに気付いている人からすれば、『これから告白します』、と捉えられかねない紛らわしい文面だったかも…。

「…で、俺はさっきのお前の告白に、返事をした方がいいのか？」

「あっ、違うの。返事とかはいいの。私自身がすつきりする為だけのものだから。」

答えは聞くまでもないから…。

「そうか…。」

冬樹は、そう一言呟いた。

今回は、完璧にふられたのに悲しくはなかった。

おそらく、冬樹に対する感情は、既に整理出来ていたのだろう。

ここ数年私を悩ませていたのは、想いを伝えることが出来なかった後悔だけだったのだろう。

「私達はこれからも、『大事な友達』だよな？」

昔、冬樹にそう宣言された時は、めっちゃくちゃ悲しかったっけ。

「…？違うな…。夏海は、今度からは義妹だよ。」

そうか、私の実姉と結婚するんだから、冬樹は義兄になるのか。

「私の方が先に生まれたのに、妹になるのは何か納得いかない！」

「何つままないことにこだわってるんだよ！バカな奴！」

「だって納得いかないんだもん！」

そうやって二人で笑い合っていると、少し涙が出た。

幸い、冬樹は気付いていないようだった。

さようなら、私の初恋。

さようなら、私の片思い。

「冬樹、今までありがとう。それと、これからもよろしく！」

「…？何だそれ。何か気持ち悪いぞ、お前。」

「うるさい！いいの！」

冬樹は首を傾げながら、私に背を向け、少し前を歩く。

私は、少し前を歩く『新しい義兄』の背中に、もう一度、「ありがとう」と呟いた。

聞こえないように、小さな声で。

春海と夏海

「どうだった？」

家に帰ると、秋姉ちゃんにそう聞かれた。

「大丈夫。もう平気。」

「そう。良かった。」

秋姉ちゃんは、ホッとしたように微笑んだ。

「娘を持つ父親なんてつまらないよ！」

親戚の人達が帰り始め、賑やかだった広間は、うちのお父さんと冬樹のお父さんだけになっていた。

さつきまで上機嫌で飲んでいたお父さんは、泣きながら冬樹のお父さんと話している。

この様子だと、明日、お父さんは号泣だな。

私は、また昔を思い出していたが、もう涙は出てこない。

思えば、随分と遠回りしたものだ。

そんなことを考えながら、少しビールを飲んでいると、

「夏海、ちょっと話さない？」

お姉ちゃんに声を掛けられる。

「どうしたの？」

「久しぶりに、夏海と女同士の語らいをしようかと。」

そう言いながら微笑むお姉ちゃん。

「二人だけの新しい生活はどうよ？」

「結構楽しいよ。」

「そう。良かった。」

「…。」

お姉ちゃんは何か言いたそうだけど、言葉にしばらく様子。

お姉ちゃんにしては、珍しいことだ。

何が言いたいのかは、何となく分かってしまったが…。

「お姉ちゃんに一つ聞いてもいい？」

「…何？」

私は、以前から気になっていたことを聞いてみることにした。

「いつから、冬樹のことが好きだったの？」

「多分、夏海より後だよ。だって、冬樹が中学生になってからだから。」

「ふーん…。」

やっぱりお姉ちゃんも、私も冬樹が好きだって気付いていたんだね…。

「ごめんね…。」

「何で謝るの？変なの！」

「冬樹に『付き合っただけ』と言われてた時…、夏海の顔が頭に浮かんだんだけど…、冬樹の告白、断らなかつたから…。」

「それは仕方ないよ。お姉ちゃんも冬樹が好きだったんだから。」

「夏海は強いね…。強くて優しい…。」

「お姉ちゃんの方がよっぽど強くて優しいよ。」

「私は、虚勢を張ってるだけだから…。夏海に、いつ冬樹を取られ

るかびくびくしてた。あの時も…。」

「…?」

あの時って何?

「実はね…、私が大学四年生の時、夏海が冬樹と何回か遊びに行つたこと知ってたの…。」

「あつ、えつ!」

驚いた。

心臓が止まるかと思った。

「でも、二人きりじゃないみたいだし、別にいいかと思ってた…。私も就職活動とか、卒論とかで忙しかったし。もしそれで、冬樹が私から離れても仕方ないとも思った…。本当はそんなことになつたら、立ち直れないくせに…。夏海を恨むかも知れないのに…。」

「ごめん…。お姉ちゃん…。」

「謝らなくても大丈夫だよ。怒ってるわけじゃないから。でも…、その後、また遊ばなくなつたよね?何で?」

この人は、どこまで知っているのだろうか?

「えーと、それは…。色々あつて…、喧嘩したから…。」

冷や汗をかいた。

詩織とのことは知ってるの？

「別に怒ってるわけじゃないのに、何を動揺してるのよ。それから、この話は冬樹に直接聞いたわけじゃないよ。冬樹は、大学生の時の夏海との再会は、私が知らないと思ってるから。」

「ハハ…。」

引きつった笑いを返す私。

「私の情報網を甘く見ないでよ！」

いたずらっぽく笑うお姉ちゃん。

やはりこの人は、タダ者ではない。

「夏海はいつから冬樹が好きだったの？」

「多分、物心ついた時から…かな…。」

「そつえば昔、冬樹と結婚の約束してたもんね。」

「…？違うよ。結婚の約束したのはお姉ちゃんでしょ？」

「えー、だって私が『冬樹のお嫁さんになってあげようか？』って言ったら、夏海が『冬樹は私と結婚するの！』って、泣いて怒ってたじゃない。」

「?????」

そうだったけ？

でも、今となってはどっちでもいいことかも知れない。

お姉ちゃん達が付き合い始めたあの日以来、初めて二人で冬樹の話をした。

私達姉妹は、一歩間違えば、お互いに憎み合う間柄になっていたかも知れない。

そう思うと、少しゾツとした。

そうならずに済んだのは、お姉ちゃんと私の、涙ぐましい努力のおかげかもと思うと、何だか可笑しかった。

「ん？夏海、何笑ってるの？」

「何でもない！」

お姉ちゃんは、首を傾げながら手に持っていたコップの中身を空にする。

私は、『大好きなお姉ちゃん』の横顔に向かって、「ありがとう」と呟いた。

聞こえないように、小さな声で。

「ん？何か言った？」

「何も。」

「二人で何を話してるの？お邪魔だったりする？」

振り返ると、秋姉ちゃんがいた。

冬樹もいる。

「家族会議中。」

お姉ちゃんは、またバカなことを…。

「何よ、それ！」

「家族会議なら、俺も聞く権利があるような…。」

「女同士の話に、首を突っ込まないの！」

お姉ちゃんに怒られて、シユンとなる冬樹。

二人の力関係を垣間見た。

四人で取り留めない話をしていると、

「こつやって四人揃ったのって、いつ以来だっけ？」

秋姉ちゃんが言い出す。

「この前は、夏海がいなかったしねえ。」

私を見ながら、いたずらっぽく笑うお姉ちゃん。

「今度、四人揃うのはいつになるのかな？」

秋姉ちゃんは、昔を懐かしんでいるようだった。

「あつ、次は五人になるかもよ。」

「「「…?」「」」

お姉ちゃん、どういうこと？

「医者で、三ヶ月目って言われました！母子共に順調です！」

「「えっ!」「」

「聞いてないんだけど、春海さん!」

「だって、言っていないもん。」

「…。」

啞然とする冬樹。

「おめでとう！春ちゃん！」

「次は、順番でいくと秋ちゃんだよ。でも、秋ちゃんは、まず相手を見つけないとだよな。」

「相手はいるよ。それに、昨日プロポーズされてOKしたし。」

「「「えー！」「」」

今日は一体、何度驚かされたんだろう。

「…：…どういうことだ、秋代！聞いてないぞ！」

四人以外の声がして振り返ると、冬樹のお父さんがいた。

「だって、言っていないもん！」

「…。」

啞然とするおじさん。

「おめでとう、お姉ちゃん。」

「おめでとう、秋姉ちゃん。」

そして、

「おめでとぅ、冬樹。」

私はそう呟いた。

みんなに聞こえないように、小さな声で。

最終話 大切な人（前書き）

最終話です。

最終話 大切な人

「お母さん、ただいまー！」

娘が、今日も元気良く、幼稚園から帰って来る。

「おかえり！」

私は、笑顔で娘を迎える。

こんな何気ない日常に、幸せを感じる今日この頃。

娘が成長した時、幼い日の思い出は、どんな意味を持つのだろうか？

楽しい思い出になるのか、悲しい思い出になるのか。

母親としては、出来ることなら楽しい思い出になるように、手助けをしてやりたい。

「お母さん、幼なじみってなーに？」

「それはね、小さい頃から、大きくなるまで、ずっと友達でいる
のよ。」

「ふーん。じゃあ、私とユウ君は幼なじみになれる？」

「そうだね、ずっと友達でいらねえね…。マナミはユウ君のこ
とが好きでしょ？」

「うん、大好き！」

「じゃあ、ちゃんとユウ君に言ってあげるといいよ。それはとても
大事なことから。」

「分かった。明日、『大好き』って言うてみる！」

子供の頃の『好き』と、思春期の頃の『好き』、大人になってから
の『好き』。

同じ『好き』でも少しずつ意味が違う。

それでも、根本的な所はきつと一緒に。

その相手が、とても大切な人だということ。

素直に自分の気持ちを伝えれば、その大切な人もいつかきっと、それに応えてくれる。

例えそれが、自分の望んだ形じゃなくても…。

何も言わずに後悔するより、言って後悔する方が、未来はきっと明るい！

〈完〉

最終話 大切な人（後書き）

今回で完結です。

お読みいただき、ありがとうございます。

多少、強引なストーリー展開があったり、矛盾があるかも知れませんが、うまくまとまったと思います。

ご意見、ご感想、ご質問などお寄せ下さい。

（最終話について）

この章に出てくるお母さんは、あえて名前を断定していません。お母さんになった夏海だと考える方が多いと思います。しかし、このお母さんは、夏海かも知れませんが、春海かも知れません。また、千絵や詩織かも知れませんが、この話に出て来ていない人物かも知れません。

完結させてみると、この最終話はなくても良かった気がします。皆様のご意見をお待ちしています。

ご声援ありがとうございました。

番外編 花嫁の父（前書き）

番外編を一話掲載します。
倉田姉妹の父親の目線です。

番外編 花嫁の父

「お父さん、お母さん、長い間、お世話になりました。」

結婚式当日の朝、娘の春海が頭を下げる。

俺は、それだけで涙腺が崩壊した。

今日は娘の結婚式だ。

俺達夫婦には、二人の娘がいる。

上の子の春海は、小さい頃から男勝りで、妹や隣の姉弟を引き連れ、近所を暴れ回っていた。

小学生になると空手を習い始め、男勝りに拍車がかかる。

そんな娘の将来を、妻の洋子は本気で心配していた。

「夏海はいいとして、春海は将来、結婚出来ないんじゃないかしら。」

そんな春海も、中学生の頃には、少し落ち着きをみせる。

どうやら、好きな人が出来たらしいと、妻は言っていた。

ホッとすると同時に、寂しくもあった。

「春海に恋人でも出来たのかしら？夏海は何か知ってる？」

春海が高校三年になった頃、休日になるといそいそと出掛ける娘の変化に、妻が気付く。

「隣の立花冬樹と付き合ってる……。」

妹の夏海が、無表情に答えた。

そうか…、冬樹君か…。

彼なら文句が付けられないな…。

冬樹君の父親である立花雅樹（通称マサ）は、俺の幼稚園の頃からの親友だ。

マサと俺は、お互い結婚したのがほぼ同じ頃。

上の子供が生まれたのも、下の子供が生まれたのも同じ年だった。

その息子というだけで、文句が付けられない。

それに、冬樹君はしつかりしてるし、頭もいい。

小学生から習っていた空手は、大会で優勝を争うレベルだ。

マサの奥さんの佳代ちゃんが入院していた頃、まだ赤ん坊だった冬樹君の面倒を、妻が見に行っていたこともある。

俺達夫婦にとっては、息子同然だ。

他の奴の方が良かったなあ。

その時は漠然と思った。

「冬樹君は、夏海と付き合ってると思ってた。」

妻の言葉に、

「冬樹君なら、春海でも夏海でもどっちでも嫁にくれてやるぞ。」

ちよっと強がってみせた。

それから年月が経ち、春海は冬樹君と結婚するという。

他の奴なら、いくらでも反対してやるのに。

「マサ、娘を持つ父親はつまらないよ。大事に育てても、他の男に取られちゃうんだから……。」

結婚式前日の昨日、マサと二人で酒を飲みながら、思わず愚痴をこぼす。

「タケちゃん（春海の父、剛）、そんなにイヤなら、強がらずに、もっと反対すれば良かっただろ！まあ、そうになったら、俺がお前を説得するけどな。」

「別にイヤじゃないんだよ。冬樹君なら文句はないし。男親は色々複雑なんだよ……。お前もすぐ分かる……。」

「秋代は当分先だろ。だから、俺はまだ大丈夫だ。」

マサ達が帰った後、娘達から秋代ちゃんもプロポーズされたらしいという話を聞いた。

ざまあみろ、マサ！

そして今朝…。

「お父さん達、ちょっとここに座って！お決まりの挨拶するから！」

おいおい、やめてくれよ。

既にこの時点で、俺の涙腺は崩壊寸前だった。

「お父さん、お母さん、長い間、お世話になりました。」

涙腺崩壊。

横目で妻を見ると、泣き笑いの複雑な顔だった。

夏海は、必死に笑いを堪えている。

くそっ、夏海の奴！

お前の時は、絶対泣いてやらんからな！

その夜…。

「お父さんてば、式の間中、ずっと泣いてるんだもん！私、正直ちよっと引いちゃった。」

醜態を見せてしまった俺は、夏海に責められてしまった。

「今回は、初めてのことだったからだ！夏海の時は一回目だから大丈夫だぞ！」

強がってみせた。

「ふーん…。」

夏海はちよっと拗ねたようだ。

「大丈夫だよ、夏海。夏海の時も、お父さんはきつと号泣だから！」

何が大丈夫なんだ、母さん。

娘を持つ父親なんて、ホントつまらん！

番外編 花嫁の父（後書き）

この話は、最終話の前に掲載する予定でしたが、カットした話です。本編に入れる予定だった時は、夏海の目線でしたが、父親目線に書き直しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2140o/>

ハル、ナツ、アキ、フユ

2011年3月3日22時38分発行